

雨水活用物語

西村 日向子

今から百年後、雨水は夏に欠かれないもの  
となった。そしてこれは、百年後のとある街  
の家族の日常である。

夏の日差しが降りそそぐ中、お父さんと弟  
は庭でねえへりお昼ねタイム。ちなみに庭の  
中でも芝生ではなく、コンクリートである。  
え？熱くないのか。て？いやいや、ここは百  
年後の未来。コンクリートの上でねえとして

も大丈夫なのです。

この時代の地下には街全体に雨水を通す管  
があります。雨が降れば、ビルの屋上のタン  
クに雨水をためこみます。これらの雨水は一  
度川の中にあるタンクに運ばれます。そして  
これらの水は土手から出た管によって、街の  
下に運ばれます。これらの水は冷えているの  
で地面から出る熱や照り返しによる温度の上  
昇をおさえることができ、お父さんと弟みた  
いにねころかっても地面は冷めたいでしう。

させて、このシステムについての街の声を聞いてみましようか。

三十代女性は

「地面が冷たくて、裸足でモイイから凜です。私の勤めている会社のビルのかかとにも管があるのでかかとも冷たいですよ。」

五十代男性は

「昔のコンクリートは地面が熱くて熱くて。今じゃこの冷たささ。」

等々、中々好評です。

しかし水はいつかはぬるくなるもの。こうしてぬるくなった水はまた再利用されていきます。

ぬるくなった水は途中で違うタンクへと。

お気づきかもしれませんがこの時代はタンクが様々なところにあります。その話しはいいとして、ぬれた水はそのタンクでろ過され、

水道管と途中で合流。今ごろはお母さんとお姉ちゃんが食器洗いをする水へと変身しているでしょう。

百年後は、街中に管が張りめぐらされ、それを上手に活用し、暑い夏を乗りこえている。むしろ、また水道水としても人々に供給されている。雨が人々にとって身近なものとなっている。